

ひと

大分・日田弁でブルースを歌う

おおうち
 コージー大内 さん(43)

昼は東京の印刷会社でインキにまみれる。夜は一転、ライブハウスでスポットライトを浴びる。

出身地の大分県日田市の方言を操るブルースで知られる。2008年に出したアルバム「角打ブルース」はじわじわと売れ、このジャンルでは異例のヒットと言われる。

21歳で上京。5年後に初ライブを経験した。米ブルース界の大御所をほうふつさせるギタープレーは、最初から評判だった。しかし、英語で歌うと、客から「お前の英語は分からん」。ならばと日田弁で歌うことにした。「そもそも自分の言葉で歌うもんやろうし」

「俺(おん)さん親父(おや)毎日ギャンブルんじよー(オヤジブギ)

へどんくれー焼酎呑みゃいいん、



ていげなもう(角打ブルース)

題材にするのは喜怒哀楽にあふれた日田での生活。家賃なしの公民館に住み込んでいた。昼と夕、母親は時刻を告げる公民館の鐘を鳴らす。酒が好きで、仕事が嫌いな父親には泣かされた。当時の愛を陽気に、時に重苦しく日田弁に乗せる。

日田は盆地の町。言葉は九州弁の中でもおっとりしていると言われる。最初は笑いを誘ってウケたのだと思っただけ。けれども、ライブの盛況は続く。ブルースは黒人の労働歌が原点とされるが、「日田弁がそのリズムに乗りやすかった。実体験を歌ったのも良かったんやろう」。

舞台上備えて毎日、焼酎をちびちびやりながらギターを練習する。

文・小田健司 写真・藤脇正真